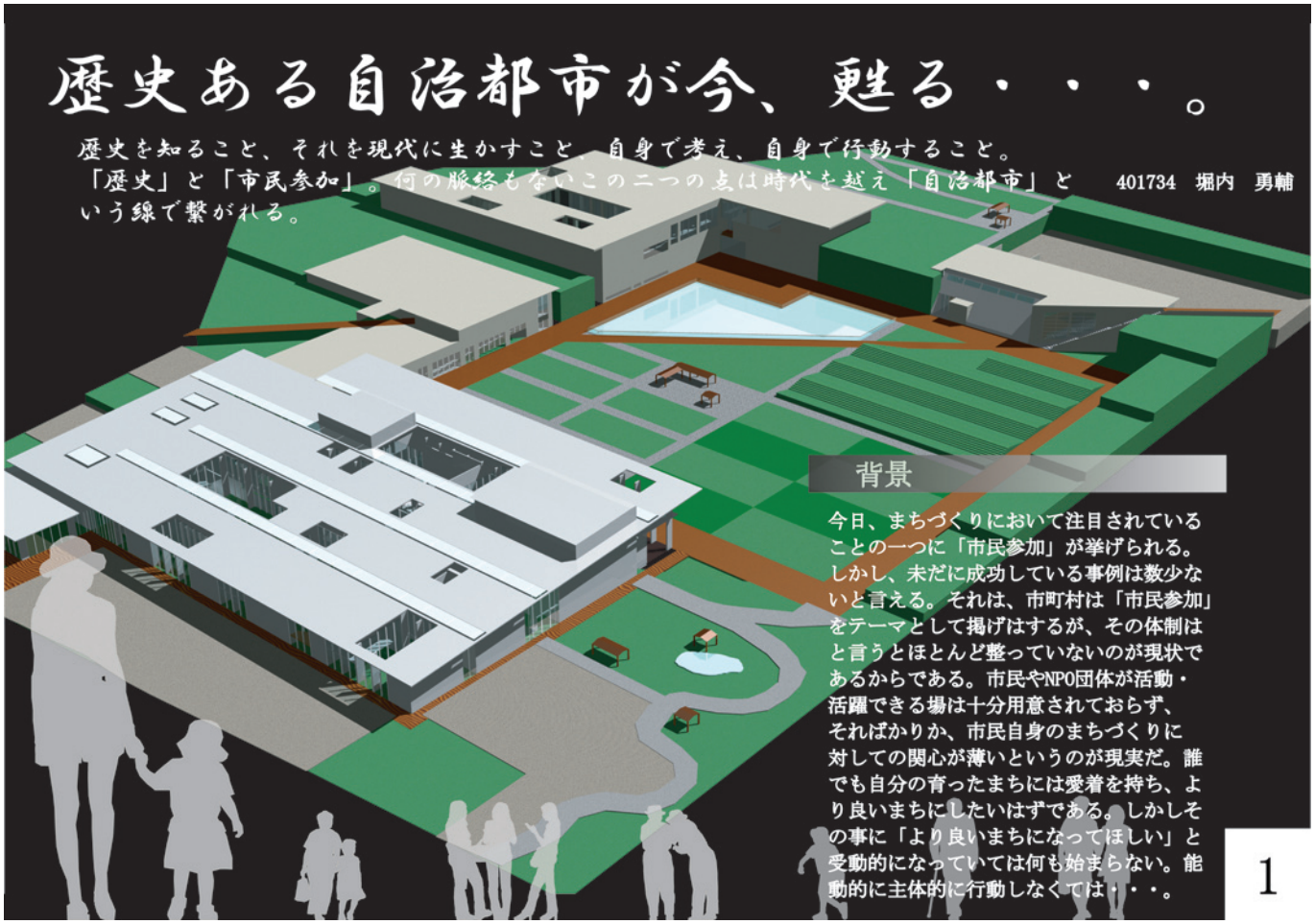
「歴史ある自治都市が今、甦る…。」401734　　堀内 勇輔

歴史ある自治都市が今、甦る・・・。

歴史を知ること、それを現代に生かすこと、自身で考え、自身で行動すること。
「歴史」と「市民参加」。何の脈絡もないこの二つの点は時代を越え「自治都市」という線で繋がれる。

401734　堀内　勇輔



背景

今日、まちづくりにおいて注目されていることの一つに「市民参加」が挙げられる。しかし、未だに成功している事例は数少ないと言える。それは、市町村は「市民参加」をテーマとして掲げはするが、その体制はと言うとほとんど整っていないのが現状であるからである。市民やNPO団体が活動・活躍できる場は十分用意されておらず、そればかりか、市民自身のまちづくりに対しての関心が薄いというのが現実だ。誰でも自分の育ったまちには愛着を持ち、より良いまちにしたいはずである。しかしその事に「より良いまちになってほしい」と受動的になっていては何も始まらない。能動的に主体的に行動しなくては・・・。

提案

・ここに述べる背景、現況、敷地状況
・長岡京時代、都が置かれた地であること
・戦国時代には自治都市であったこと
・本敷地は市の中心として機能する可能性を秘めていること

Program1　市民主体の活動を促進する　市役所
Program2　現代までの歴史を紹介する　展示館
（古墳、長岡京、戦国）

・まちづくりへの関心向上、及び市民参加の促進
・コミュニケーションの促進

計画敷地

京都府向日市寺戸町西ノ段五番地
かつての都、『長岡京』が置かれ、その中心として栄えた京都府向日市。本計画敷地はさらにその中心部に位置する。隣接する京都市、長岡京市からのメインストリート上、かつ京都と大阪を結ぶ国道171号線から市内に入るメインストリート上に現在存在する向日町競輪場。高度経済成長期に建てられたこの競輪場はその役割を果たし、今では老朽化もかなり進行し、さびれた表情を見せている。しかし市の最中心部であるという立地条件から市民には馴染み深い土地であるようである。

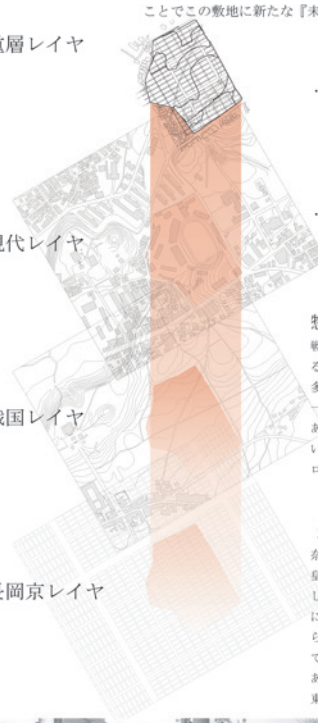
周辺状況

計画敷地周辺には市役所、市民会館、商工会館等の行政機能が散在している。そのせいか、それらはお互いに連携を取り合っているとは決して言えず、さらには市役所が小高い丘の上に立地しており行きづらいため、市民と庁舎役員とのコミュニケーションはかなり希薄な状態である。
又、京都府において最も多く遺跡が残る場所でもあり、古墳や長岡京跡を始め、多数の歴史的遺構に恵まれた土地である。

レイヤの重層

長岡京時代、戦国時代、そして現代の三つのレイヤを重ねることでこの敷地に新たな『未来』のレイヤを創造する。

重層レイヤ



現代レイヤ

現況
・長岡京時代、政治の中心であった向日市の中でもさらにその中心部の宮城に当たる本計画敷地付近には様々な行政機能が散在している。しかし　どの機能も決して満足できる規模ではなく、老朽化も進行している。特に市の顔とも言える市役所は小高い丘の上（高低差（13m））に位置し、極めて分かりづらく　行きづらい。
・一方現在市では、市民参加が大きく取り上げられている。しかしその体制はまだほとんど整っておらず、市民への浸透度も低い。そういった場も設けることが出来ていない。

戦国レイヤ

惣
戦国時代、村々の百姓達は、村を自衛して自分達の村を造るため、「惣」と呼ばれる自治結合を作った。農民らは「多数の人々が心を合わせて共同行動をとること」をいう「一揆」を起こし、幕府の徳政令などの法令を出させた事もあったようである。そもそも「徳政」とは「仁政（情け深い政治）を施すこと」を言い、農民らはこの「徳政」をスローガンに一揆を起こしたのである。

長岡京レイヤ

幻の都　長岡京
奈良時代、貴族達を平城京の本拠地から引きはがし、新天皇の権力の下に再結集させ、政治基盤を強化すること。そして水陸交通の発達した土地へ遷ることによって流通経済に対応すること。この二つの目的をもって784年に平城京から遷都され、794年に平安京へ移るまでの10年間、乙訓の地で営まれた長岡京。中心部の宮城は全て現在の向日市城にあり、東西約1.0km、南北約1.6kmの大きさを誇り、京城は東西約4.3km、南北約5.7kmという広大な範囲であった。

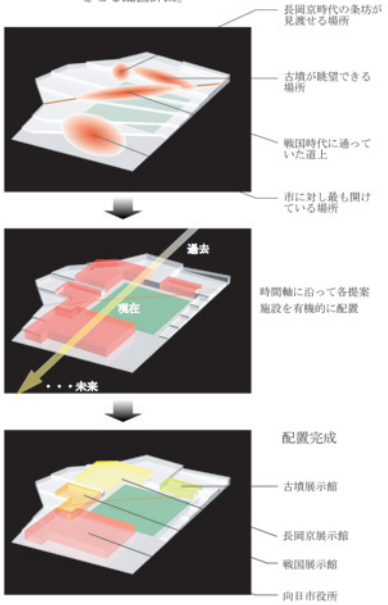
「歴史ある自治都市が今、甦る …。」401734　　堀内 勇輔

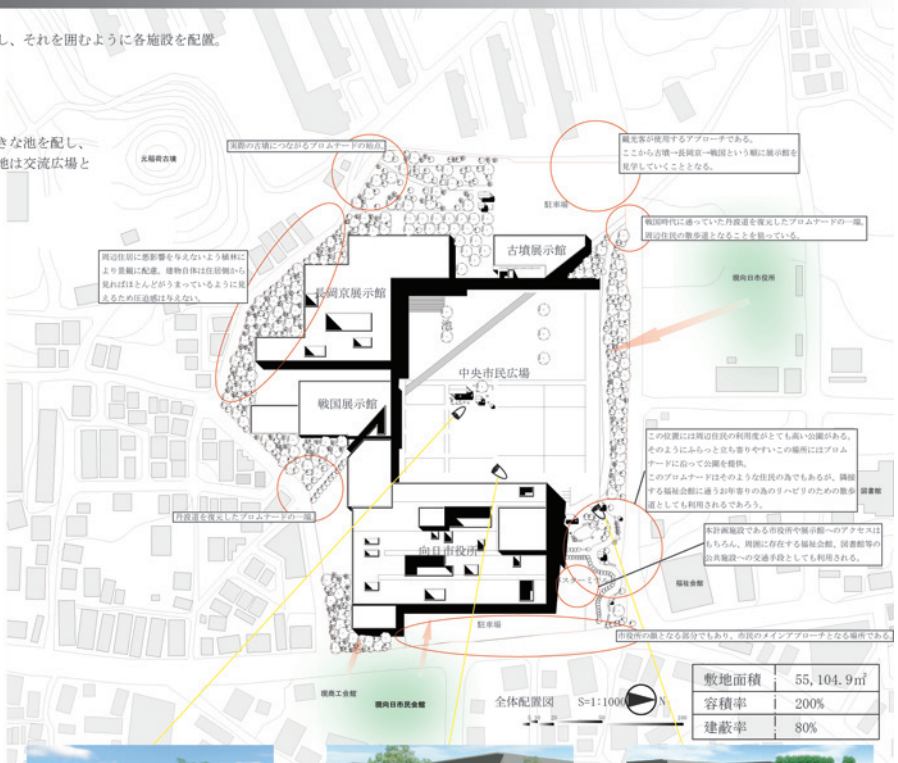
配置計画

長岡京時代の主要単位である「一町」（120m×120m）を中央広場とし、それを囲むように各施設を配置。
　古墳時代には堀による古墳の防護
　長岡京時代には水運の発達による流通経済への対応
　戦国時代には用水問題に対応する事による惣の結束
という「水の恩恵」をどの時代にも受けていた。
そこで現代においても水の恩恵を受けることを考え、中央広場に大きな池を配し、その池を緊急時の用水としても用いられるようにする事で、この敷地は交流広場としてだけでなく、防災拠点としても機能する。

配置ダイアグラム

歴史→自治→市民参加のflowを成立させる配置計画。

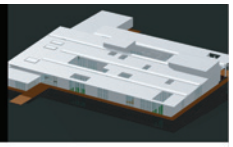




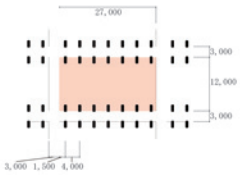
3

Program1　向日市役所

現在のほとんどの市役所は地域の特殊性、アイデンティティを活かしきれていない。これからの市役所は行政中枢であるとともに、各地域のアイデンティティを存分に活かす文化の具現であり、市民活動の中心かつ精神的中心となっていくべきである。

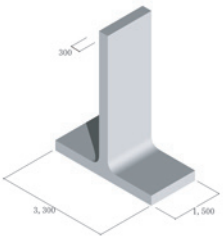


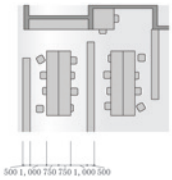
システム説明



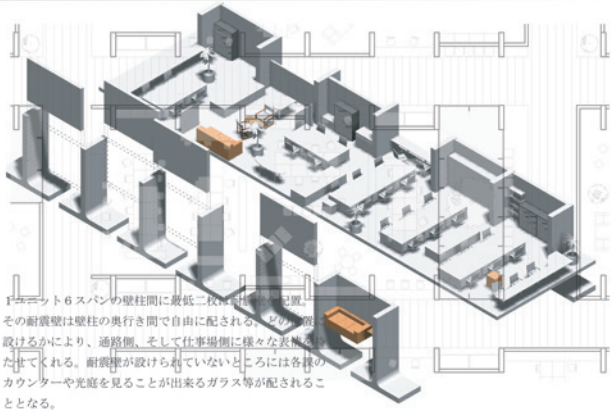
長岡京時代に使われていた条坊制を市役所内のゾーニングに引用。
27m×12mを１ユニット（これを長岡京時代は１戸主と呼んだ）とし、「戸主」という文字通りそのユニット毎に市役所内の各機能（都市計画課、市民課・・等）を有機的に配置。

この市役所はモデュール300×1,500（mm）のPCの壁柱で全て構成されている。PCの素材感による適度な緊張感とその配置によるフレキシブルな空間構成を実現する。

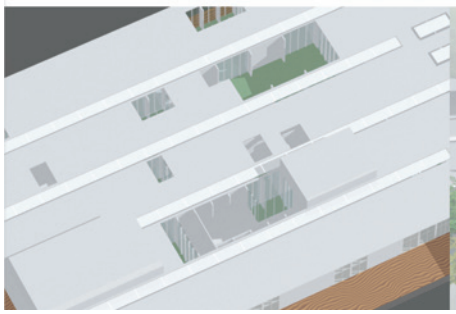


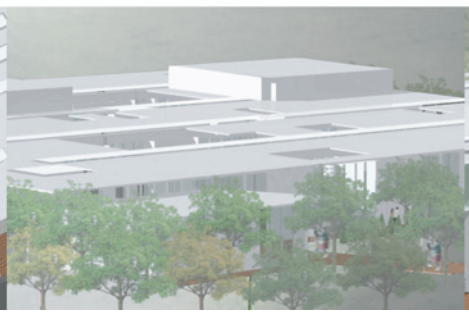


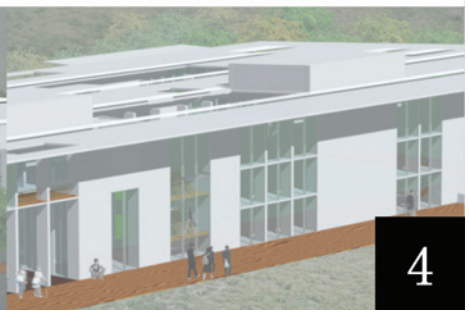
柱間4,000mmというのはモデュラーコーディネーションより割り出された寸法である。
人が最も作業・活動しやすい寸法となっている。



1ユニット６スパンの壁柱間に最低二枚の耐震壁を配置。その耐震壁は壁柱の奥行き間で自由に配される。その耐震壁を設けるかにより、通路側、そして仕事場側に様々な表情をもたせてくれる。耐震壁が設けられていないところには各種のカウンターや光庭を見ることが出来るガラス等が配されることとなる。

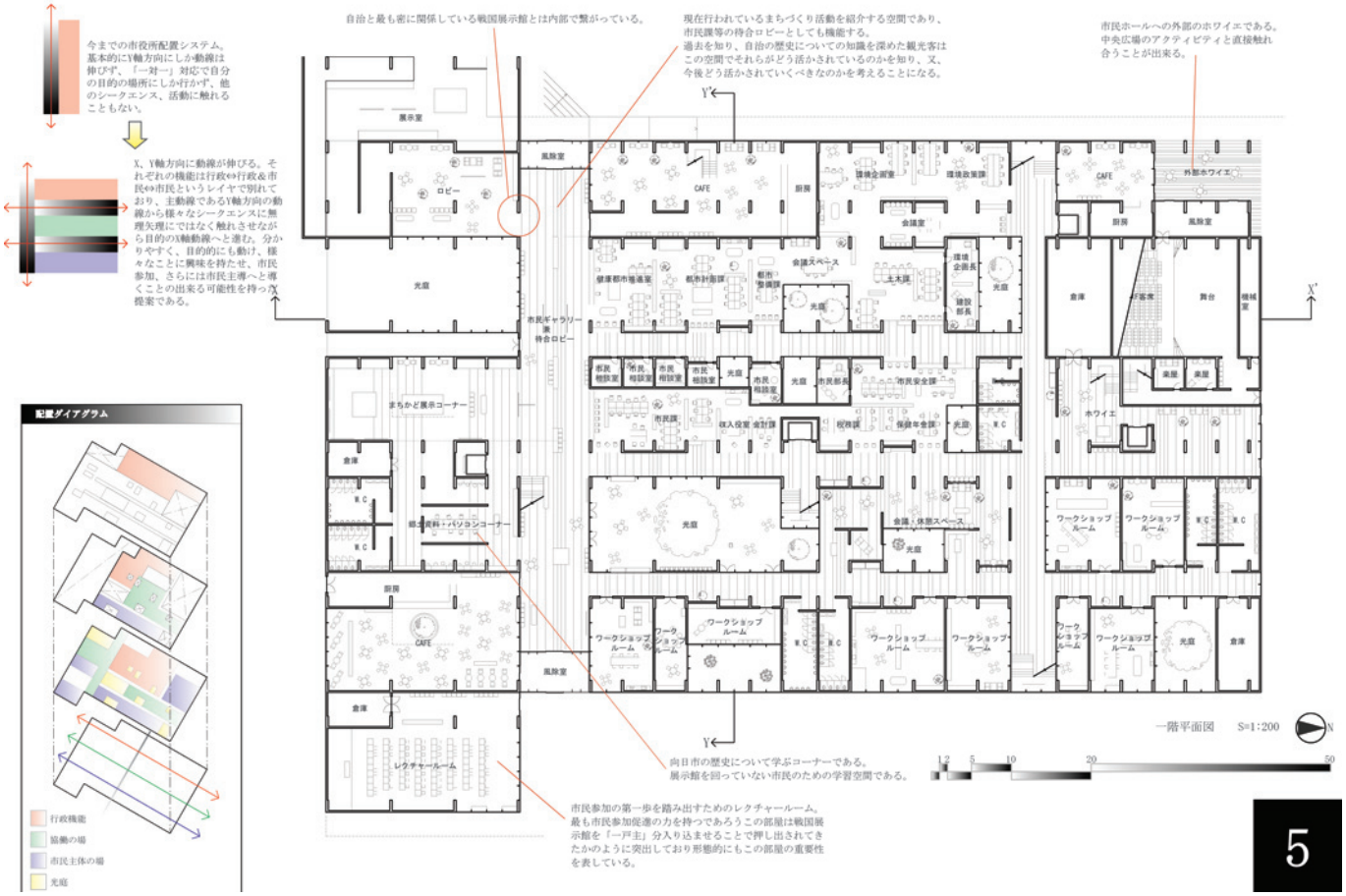




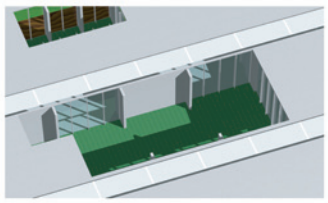


4

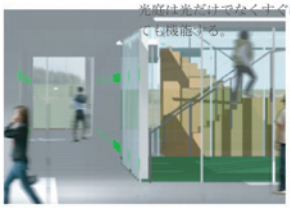
「歴史ある自治都市が今、甦る …。」401734　　堀内 勇輔

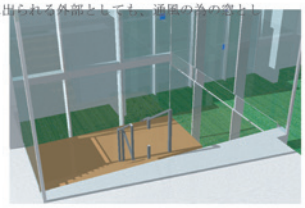


5

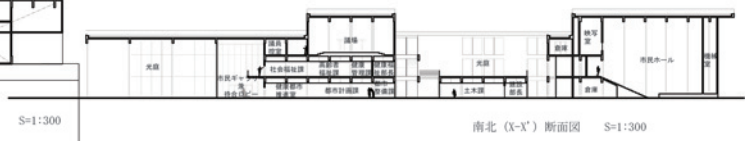


光庭：人工照明のみで光を採りがちな従来の市役所に対してこれは動線上にスッと走る横長のトップライトに始まり、要所要所に設けられた光庭、及びトップライトによって快適な仕事・作業環境を提供する。
光庭は光だけでなく主空間に外に出られる外部としても、通風の為の窓としても機能する。





この敷地にある本来の傾斜を屋根の傾斜に取り込み周囲の景観に出来るだけなじませている。これは造形的にも内部の機能決定にも有効に作用している。



6

「歴史ある自治都市が今、甦る …。」401734　　堀内 勇輔

Program2-1　戦国展示館

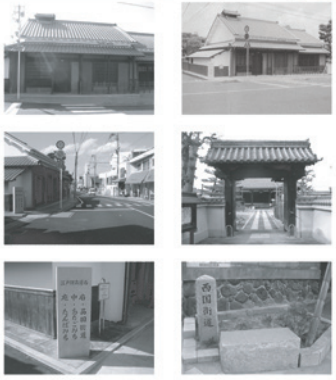
戦国時代。むしろ「自治時代」。農民らは戦乱の世において武士に侵されずにこのまちを作り、治めた。その生い立ち、内容についての紹介・展示。館の出口は市役所とつながっており、これからのまちづくりのキーワードとなるであろう「自治」という点で繋がっている。

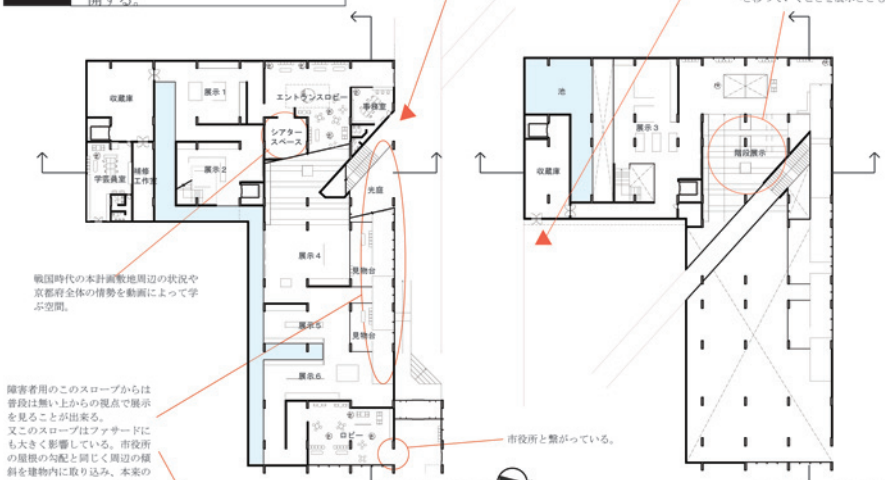
建物内部にある水空間は用水・治水により結束を強めた惣によって作られた自治都市を示すためのツールである。これらの空間を軸に展示が展開する。

中央広場を横切る丹波道を復元したプロムナードはこの階段を上り、本来の丹波道と繋がる。階段を上りながらも展示館内部の展示を俯瞰見ることが出来る。

展示館側から見れば二階だが、周囲から見れば6Lであるこのレベルから展示物の搬入を行う。

階段を下りながら織田の時代から徳川の時代へと移っていくことを展示とともに体感できる。



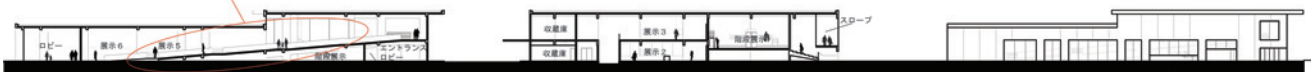


戦国時代の本計画敷地周辺の状況や京都府全体の情勢を動画によって学ぶ空間。

障害者用のこのスロープからは普段は無い上からの視点で展示を見ることが出来る。
又このスロープはファサードにも大きく影響している。市役所の屋根の勾配と同じく周辺の傾斜を建物内に取り込み、本来のこの敷地の傾斜を意識できるようになっている。

市役所と繋がっている。

展示1	戦乱期（応仁の乱等）	
展示2	自治都市の説明（はしり）	
展示3	織田の時代から徳川の時代へ	
展示4	向日神社について	
展示5	自治都市が出来上がっていくまで	
展示6	自治都市向日町成立	



東西断面図　S=1:300　　南北断面図　S=1:300　　北面立面図　S=1:300

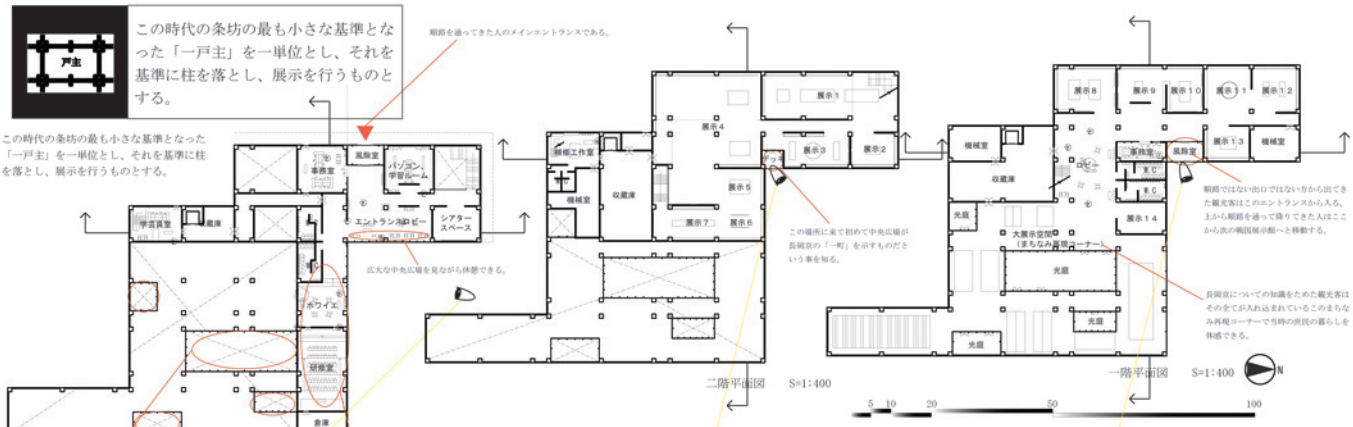
Program2-2　長岡京展示館

784年から794年のわずか10年間ではあるが、都が置かれその行政の中心であった本計画敷地。その“幻の都”長岡京の生い立ちに始まり、当時の都での人々の暮らしや行政機能（大極殿、内裏、朝堂院等・・・）等の展示。当時のまちなみを体験できる仕掛けも。

この時代の条坊の最も小さな基準となった「一戸主」を一単位とし、それを基準に柱を落とし、展示を行うものとする。

順路を通ってきた人のメインエントランスである。

この時代の条坊の最も小さな基準となった「一戸主」を一単位とし、それを基準に柱を落とし、展示を行うものとする。



広大な中央広場を見ながら休憩できる。

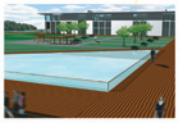
この場所に来て初めて中央広場が長岡京の「一町」を示すものだという事を知る。

順路ではない出口ではない方から出てきた観光客はこのエントランスから入る。上から順路を通って降りてきた人はここから次の戦国展示館へと移動する。

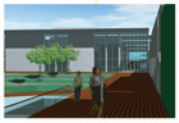
長岡京についての知識をためた観光客はその全てが入れ込まれているこのまちなみ再現コーナーで当時の庶民の暮らしを体感できる。

一階のまちなみ再現コーナーをより実際の雰囲気に近づけるために光庭を設けている。

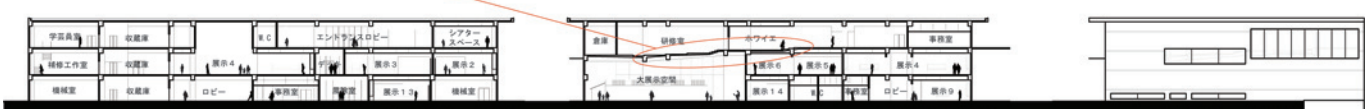
市役所、戦国展示館と同じく周囲の傾斜を取り込むために、ここでは研修室を配しその段差を利用している。



二階デッキより中央広場を見る。長岡京のグリッドを体感できるよう上からの視点を設けた。



一階出口より市役所方面を見る。市役所のこちら側のファサードは開放的であり、現在のまちづくり活動が見れるようになっている。



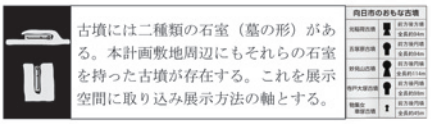
南北断面図　S=1:300　　東西断面図　S=1:300　　北面立面図　S=1:300

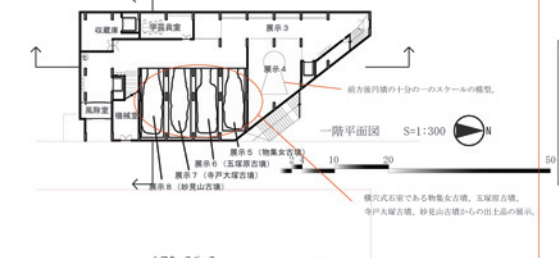
「歴史ある自治都市が今、甦る …。」401734　　堀内 勇輔

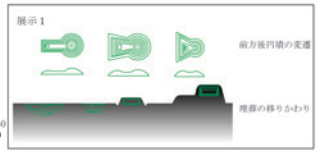
Program2-3　古墳展示館

向日市周辺は古都・京都の中でも最も多く遺跡・遺構が密集している地である。歴史のレイヤを重ねることによって成立するこのプログラムにおいてその遺跡・遺構の紹介、展示抜きでは始まらない。そこで、最も歴史の古い古墳時代（縄文、弥生も兼ねる）を展示ルートの出発点とする。ここから時代の流れに沿って各時代の展示が行われていく。

古墳には二種類の石室（墓の形）がある。本計画敷地周辺にもそれらの石室を持った古墳が存在する。これを展示空間に取り込み展示方法の軸とする。







南北断面図　S=1:300

東西断面図　S=1:300

東面立面図　S=1:300

現在・過去・そして未来

「歴史」の流れを考える時、『過去～現在～未来』と思いがちだが、これは果なる時間の流れである。

「歴史」の流れはいつの世でも『現在～過去～未来』である。現在の人々が振り返らなければ過去はない。現在の人々が残そうとしなければ過去は消えてしまう。現在の人々が積極的に調査研究するから過去は過去として明らかになり、それを伝えていこう、残していこうとするから後の時代に残されるのである。

ちょうどそれは、日本のこころのふるさとと形容されるような田園風景や里山に代表される『自然』が文字通り「自然に」そこにあるのではなく、常に時々の人間によって手が加えられ、維持されたから存在したというのに似ている。開発工事によってのみならず、放置されたがために多くの「自然」が失われた。

同じように、何もしなければ「歴史」も失われる。ではなぜ過去を知ろうとするのか。

それは未来を創造するためである。人々の過去の営みを知って、その経過と結果、あるいは到達点を知るから、これから先どうして行くべきかの方向性が見えてくるのである。

現在の人々が今どういう時代を満足のいくものと思えなければ思えないほど、過去を知る必要があるのである。